

キャリア教育の手法としてのキャリアモデル

平 尾 元 彦

要旨

キャリア教育の一手法としてのキャリアモデルについて、山口大学での実践および学生へのアンケート調査結果を報告する。課題の趣旨である「共感する働き方」を見つける目標はほとんどの学生が達成し、自分のキャリアデザインにつながる点への理解も得られるなど、手法の有効性が確認された。課題設定においてキャリアモデルを探索する方法をより詳細に解説すべきこと、そして、働き方に関するデータベースのさらなる充実が求められることを今後の課題として指摘する。

キーワード

キャリアモデル，キャリア教育，アンケート調査

1. はじめに

就職活動の初期段階で「やりたい仕事がない」「なりたい姿がイメージできない」という大学生は決して少なくない。もちろん活動途中での様々な出会いと経験によって自分の目指す道を見つけていく学生は多いものの、活動してもわからない、わからないから活動できない学生が少数派ではないことは、多くの大学の現場感覚だろう。

インターネットによる就職活動は今や完全に定着した。ネットを利用して会社にエントリーをし、ホームページで情報を得て企業研究を進めていくスタイルは、いまの大学生には当然のこととして受けとめられており、会社訪問解禁日に本社に列をつくる十数年前の姿や、同じ大学の卒業生に連絡をとって学内外で会い情報を得る姿は想像すらできないようである。インターネットによる就職活動は企業の採用活動を効率化させたように見える反面、学生が主体的に動かなくなったことや、

ミスマッチ応募の増加による企業の負担増など、様々な問題を表面化させることになった。

この反省から近年、選考前のオープンセミナーの開催など学生に直接情報を伝える機会を増やすなど、企業はリアルな情報提供に力をいれてきた。このなかで、昨今の特徴的な情報提供手法として、働く人に焦点をあてたパンフレットの作成や各部門で活躍する若手社員との懇談会などの開催がある。当社にはこういう人材がいる、こういう働き方ができるという実際の姿をみせることで、より現実感覚を持って仕事を理解してもらおうとする試みである¹⁾。これによって学生は、働き方に関するリアルな情報を入手し、自分の価値観に照らし合わせて判断しながら自らのキャリアを考えることができ、将来の自分の働く姿を想像しながら道筋を描いていくことができる。これがここで焦点をあてるキャリアモデルであり、キャリアデザインのひとつの手法として注目されている。

本論文は、大学生のキャリア教育に同手法

を取り入れた事例に基づき、学校教育において望ましいキャリアモデル手法に関する考察を行うものである。山口大学での実践を報告するとともに、その効果を検証し、問題点を明らかにしたい。

2. キャリアデザインのためのキャリアモデル

「キャリアモデルを見つけよう!」とは、就職活動を前にした学生たちに多くの識者が語りかける言葉である。ここで言うキャリアモデルとは、「こんな働き方をしたい」「こんな生き方をしてみたい」「この人はかっこいい」など、自分が共感できる職業人を意味する。目標とする人物があれば、なぜその人物を目標とするのか、自分はどのような働き方をしたいのか、その人物に投影された要素を観察することによって自分の価値観への理解を深めることができるため、自身のキャリアデザインに大きなヒントを与えてくれる可能性が高いと考えられる。

古野[1999]は、キャリアデザインのためのモデルの活用として、キャリアデザインを行うためには現実(外的環境)と自己の統合を図らなければならないとしたうえで、この統合を容易にする方法としてロールモデルを使ったアプローチを提唱している。ここでロールモデルとは「憧れの先輩モデル」のことであり、伝記にのるような偉人もあれば、父親・母親、親戚、OBOGや会社の先輩もありうる。彼らの働き方、職業観を学ぶことによって自分のなかのこだわりや価値観が浮き彫りにされることも多く、将来の自分の働き方をリアリティを持って描くことが可能となる。古野の言うロールモデルがまさにここでのキャリアモデルであり、あこがれの先輩を調べて見つけることは、キャリアデザインのひとつの手法として活用できると考えられる²⁾。

では、憧れの先輩をどのように見つけることができるだろうか。「 のようになりたい」とは、子どもの頃誰しもが思い描く経験を持つものだろう。伝記本に代表される書籍からの情報は、まさに従来から活用されていた手法である。伝記的な情報は個人の足跡を丹念に追うことができるというメリットはあるものの、様々な生き方から自分にあったものを見つける点から考えるとあまりに時間のかかる方法である。なにより偉大な人物に関する情報はたくさんあるものの、実は普通の人の普通の働き方は、書籍になりにくいという欠点を持つ³⁾。また、親、親戚や身近な人物からさがすというのも現実的方策ではあるが、これでは考える仕事の範囲が狭くなってしまおうという問題点を抱える。

インターネットの発達、キャリアモデルの手法に新たな可能性を見出しつつある。大学生がよく活用する就職情報サイトのリクナビは、「会社の事業内容や経営情報だけでは、どのような働き方ができるのかはわかりにくい。リクナビでは、「仕事研究」で先輩たちのナマの声を聞くことができる」として、数年前より「仕事研究」のコーナーに、その会社で働く個人の仕事の内容、やりがい、失敗談、アドバイスなど写真入りで具体的に情報を伝達する仕組みをつくっている。例えばリクナビ2005には9,012人の働く先輩が掲載され(2005年2月3日現在)仕事を具体的に理解できるよう工夫されている⁴⁾。

このほかインターネットを活用した仕事情報の提供として、NPO法人キャリアナビの取り組みがある⁵⁾。キャリアナビは、自分だけの生き方と「夢中になれるモノ」を探すために、様々な職業で実際に働いている輝く大人(ナビゲーター)と「取材」による“出会い”を数多く積み重ねて、オンリーワンな大人達の“生き様”を蓄積するもので、メンバーが取材した記事は「インターネットのお仕事人辞典」としてデータベース化されて閲

覧可能となっている。このキャリアナビの活動については、すでに学校教育においてもいくつか活用事例が存在する⁶⁾。

3. キャリアモデルレポート：山口大学の実践例

キャリアモデルの考え方を学校教育に活用するひとつの試みとして、山口大学で実施したレポート課題を紹介したい。山口大学では2000年より共通教育にキャリア関連授業を設け、キャリア教育に力をいれてきた。2004年度は、低学年向けの主題別科目「キャリアデザイン」(後期開講)、高学年向けの総合科目「就職」(前期開講)に分け、キャリアモデルは後期の低学年向け講義の中間レポートとして実施した。

この講義「キャリアデザイン」のシラバスに掲載される概要と目標は以下のとおりである。

概要(授業案内)：

キャリアデザインとは、人生設計。とくに「職」にかかわる自分の未来への道を描くこと。本講義では、自分を知り、仕事を知り、そして、なるための道を知るために必要となる、(1)自己分析の方法、(2)企業研究の方法、(3)就職活動の方法を解説する。また、この講義では山口大学の卒業生数名をゲストとして招く予定である。先輩方の大学生から社会人への道筋をケーススタディとしながら、キャリアデザインを考えていきたい。

目標：

先輩の学業から就業への接続過程の話を参考にしつつ、自分自身のキャリアデザインを考えて、大学での目標を明確にすることを、この授業目標とする

講義では、山口大学の卒業生をゲスト講師

にお招きし、ご自身の大学時代のこと、就職活動のこと、仕事をしてからの苦労話や後輩へのメッセージなど、大学から社会へと歩む過程の経験談を語っていただくことを中心に、授業を進めてきた。ゲストとして来ていただくのは、おおむね25～35歳の学生にとって身近に感じられる先輩方である。この授業の到達目標でもある最終レポートの課題は「自分のキャリアデザインを描く」であり、講義で先輩方の話を聞きながら、自分が共感できる働き方を考え、そうなるための道筋を描き、大学で何を学ぶかを明確にしていくことが求められている。とくに入門科目に位置付けられるこの講義では1年生の受講者が大半を占める。キャリアデザインと言うとどうしても就職と直結してしまいがちであるが、実は彼らにとって今重要なことは、大学時代をいかに有意義に過ごすかという点であり、講義ではこの点が強く意識されている。

お招きしたゲスト講師の先輩一人一人がキャリアモデルそのものであるが、それ以外にも幅広くモデルとなる憧れの先輩をさがすことはキャリアをデザインするために有効との観点から、この講義の中間レポートには、自分のキャリアデザインを考える前段階として「キャリアモデル」の課題を課した。学生に配布した説明資料の抜粋は表1のとおりであり、ここでは共感できる働き方を見つけることが求められている。授業中には、NPO法人キャリアナビによる『天職の見つけ方～親子で読む職業読本』、『この人がかっこいい！この仕事がおもしろい！』の2冊の書籍を実際に持ち込んで紹介し、NHK『プロジェクトX挑戦者たち』は図書館に所蔵しているとの情報を伝えた。また、様々な働く人の生き方を検索できるサイトとして、リクナビ、キャリアナビ、お仕事未来図鑑 JobShowerを紹介し、これらのサイトを活用しても、本で調べても、自分でインタビューしても、キャリアモデルをさがす方法はどのようなもので

もかまわないことを最初にアナウンスした。

このレポート課題を説明した2004年11月26日から提出日の12月24日までの間、授業では、この課題に関する質問に答えるとともに、補足説明を行った。追加的に説明した主な点は、キャリアモデルは著名人がかまわないし、むしろ望ましい面もあるということである。これに対して学生からの質問で「偉大な人物にはなれそうにないがよいか?」「その職業につけるとは思わないがそういう働き方をしたい場合はモデルに選んでよいか?」との質問を受けた。もちろん両方とも可である。今回の課題の目的は「キャリアモデルを選んで決める」ところにあるわけではなく、「自分が

共感する働き方を具体的にイメージするためにモデルを見つける」ことにある。「この人のすべてを肯定するわけではないが、この働き方が好き」というように一部であってもかまわないことを強調するとともに、著名人に関しては情報がたくさんあるので課題としてはやりやすいだろうとの点を説明した。また、「家族はダメか?」との質問も受けたが、今回は家族以外で考えてほしいと回答した。より幅広く働き方を考えてほしいということ、親のインタビューは別の講義の課題として設定しているためである⁷⁾。

表1 キャリアモデル課題文書

主題別科目「キャリアデザイン」2004.11.26
<p>中間レポート：キャリアモデル</p> <p>1. 目的</p> <p>キャリアモデルとは、個人がキャリアを考え選択する際に、その方向性を示すようなモデル(ひながた、模範)となるもの。具体的な働く個人の姿がキャリアモデルそのものであり、自分にあった働き方をイメージするのに役立つ。自分自身のキャリアをデザインする前に、キャリアモデルを見つけることは自らの働き方をとらえる上で有効であり、今回のレポートは、キャリアモデルの発見により、自分が共感できる働き方を具体的な人物を通じて理解することを目的とする。最終レポートキャリアデザインの前準備と位置づけられる。</p> <p>2. キャリアモデルをさがす</p> <p>キャリアモデルは、①働き方が共感できる人、②実在の人物であること(会ってなくてもかまわない)、③書籍・ホームページ等で調べても実際にインタビューしてもOK、④なるべく家族は避ける(今回は)、さがし方はいろいろ、指定は無し。平尾研究室リンク集も参考に。</p> <p>書籍：『天職の見つけ方～親子で読む職業読本～』『この人がかっこいい!この仕事がおもしろい!』日本経済新聞社『働くということ』、NHK『プロジェクトX挑戦者たち』など ホームページ：リクナビ2005 http://www.rikunabi2005.com/ キャリナビ http://www.carinavi.org/ 「この人がカッコいい」など 会社パンフレット：とくに採用関連のものには詳しく出ていることもあり 新聞記事：朝日新聞 DNA など活用のこと。図書館の専用端末で新聞記事検索ができる</p> <p>3. レポートの書式</p> <p>レポートの書き方は自由であるが、以下の点を盛り込むこと。①モデルはどのような人か(職業や会社名など、氏名はあってもなくてもかまわない)、②働き方の共感した部分は何か(仕事への取り組み姿勢、仕事への考え方、ワークスタイルなど)、③なぜそこに共感したのか、④その働き方ができるまでどういう道を歩んできたか(わかれば)、⑤どういう調べ方をして見つけたのか、情報源を明記すること(リクナビ2006で をキーワードに検索して見つけたなど)。資料添付の必要はないが再現性を確保してほしい</p>

注) 学生配布資料から主要箇所を抜粋したもの

さらに、補足的に強調した点として、この課題は決してキャリアモデルを“決める”ものではないということである。当初の学生の反応に「やりたい仕事かわからないのに、キャリアモデルが決められるわけない」というものがあり、この種の質問は多く受けた。これに対しては、なんとなくでもかまわないので、「この働き方がいいな」「この人カッコイイな」という人物を見つけることが第一であることを説明し、かつ、楽しく考えるようメッセージを送った。提出されたレポートをみる限り、この点は理解されたものと思われる。

4. キャリアモデル課題実施者へのアンケート調査

課題の提出日12月24日にアンケート調査を実施した。当日の出席者に調査票を配って趣旨を説明したうえで回答を求め、その日の講義終了後に回収した。なお、対象はキャリアモデルレポートを完成させた者とし、無記名で回答を求めた。

回答者は258人であり、学部・学年は以下

のとおりである。なお、回答者のうち男子学生は44.2%、女子学生は51.6%、性別無回答が4.3%であった。

以下、この調査を通じてわかったことを順に記述していく。

4-1 モデルとして選んだ人物

このような課題設定では、学生たちはどのような人物をキャリアモデルとして選ぶのだろうか。過半数の55.4%が「このレポートで見つけた人」を選び、自分のなかでの新たな人物をモデルとした。職業人を掲載したサイトを紹介したこともあって、これらを活用してキャリアモデルさがしに取り組んだ学生も多い。一方で、これまで知っていた人を選んだのが44.1%である。このうち著名人を選んだのが18.2%であり、作家や発明家などが選ばれている。著名人ではないが知っていた人を選んだ者が8.1%、直接会ったことのある人は17.8%で、学校の先生やこの講義に招かれたゲスト講師の先輩をキャリアモデルに描いた学生もいた。

表2 アンケート回答者の学部・学年

学部	人文	55 (21.3)	学部	1年生	211 (81.8)
	教育	39 (15.1)		2年生	24 (9.3)
	経済	124 (48.1)		3年生以上	15 (5.8)
	理学	28 (10.9)		無回答	8 (3.1)
	医・工・農	12 (4.7)		合計	258 (100)
	合計	258 (100)			

()内は回答者総数258に占める割合(%)

表3 モデルとして選んだ人物

これまで自分が直接出会ったことのある人	46 (17.8)
直接会ったことはないが知っていた人(著名人)	47 (18.2)
同上 (著名人ではない)	21 (8.1)
このレポートで見つけた人	143 (55.4)
その他	1 (0.4)
合計	258 (100)

()内は回答者総数258に占める割合(%)

表4 モデル選定の手順

まず会社を決めて、その中からさがした	4	(1.6)
まず職種を決めて、その中からさがした	93	(36.0)
まず働き方を決めて、その中からさがした	37	(14.3)
最初からキャリアモデルとなる人物がいたので、その人を調べた	54	(20.9)
偶然みつかった	64	(24.8)
その他	6	(2.3)
合計	258	(100)

()内は回答者総数258に占める割合(%)

4-2 モデル選定の手順

学生たちはどのような考え方でキャリアモデルに到達できたのだろうか。モデル選定の手順を質問したところ、もっとも多いのは職種からさがした学生で36.0%が該当する。一方で、偶然みつかったという者も24.8%いる。レポート課題であるため必ず一人は見つけなければならないため、さがしながら考えていった学生も少なくない。この講義は1年生がほとんどということもあってか、会社を決めてさがしたのは1.6%と少数であった。おそらく3~4年生になるとこの回答が多くなるとみられるが、会社にこだわらずに働き方を研究できるという点から、低学年次にこのような機会を与えることに意味があると考えられる。一方、最初からキャリアモデルとなる人物がいたと答えたのは20.9%に過ぎなかった。これ以外の8割の学生はこの課題をきっかけに、モデルとなる人物をさがしたことになる。

4-3 モデル調査の情報源

キャリアモデルの働き方を調べたときに最も活用した情報源を尋ねたところ、インターネットが60.5%で最多である。具体的には講義のなかで紹介したキャリアナビ(30.2%)、リクナビ(14.0%)を活用した学生は多い。インターネットで気軽に利用できることや、一人一頁でコンパクトにまとめられていること、検索機能がついているので自由にさがす

ことができ、職業研究の幅が広がることなど、キャリアモデル探索に活用しやすい点が評価されたものとみられる。また、書籍の活用は18.6%であって必ずしも多くはなかった。講義で紹介した『この人がかっこいい!この仕事がおもしろい!』は4.3%、『天職の見つけ方』は0.4%であるほか、『プロジェクトX』は2.3%であった。その他の書籍が11.6%を占めるが、本人の書いた本で調べた学生が多かったようである。

さらに、今回のレポートのために直接本人に取材したという学生が7.0%いる。この方法を推奨したわけではないが身近にいる憧れの先輩モデルとして大学の先生を取材した学生などがここに含まれる。このほか、これまでの自分の記憶で書いた(今回のレポートのために調べてない)という学生が12.8%いた。課題では情報源について何も限定しなかったが、調べる機会を与えるという課題の趣旨からすると、自分の持つ情報だけで書くのは望ましいとは言えない。1割を超える学生がここに分類されることは課題設定のあり方に問題があると言わざるをえず、この点は今回の反省点でもある。

表5 モデル調査のための情報源

これまでの自分の記憶で書いた（今回のために調べてない）	33	（ 12.8）
今回のレポートのために直接本人に取材した	18	（ 7.0）
書籍を活用して調べた（雑誌・新聞を含む）	48	（ 18.6）
インターネットを活用して調べた	156	（ 60.5）
その他	1	（ 0.4）
無回答	2	（ 0.8）
合計	258	（ 100）

（ ）内は回答者総数258に占める割合（％）

書籍（雑誌・新聞含む）の情報源

この人がかっこいい...（キャリアナビ）	11	（ 4.3）
天職の見つけ方（キャリアナビ）	1	（ 0.4）
プロジェクトX	6	（ 2.3）
その他	30	（ 11.6）
合計	48	（ 18.6）

インターネットの情報源

リクナビ	36	（ 14.0）
キャリアナビ	78	（ 30.2）
お仕事未来図鑑 JobShower	4	（ 1.6）
会社のホームページ	10	（ 3.9）
本人のホームページ	9	（ 3.5）
その他	19	（ 7.4）
合計	156	（ 60.5）

（ ）内は回答者総数258に占める割合（％）

4-4 レポート作成時間

提出するレポートはA4紙1枚とし、書き方は自由である。このレポートを仕上げるために学生たちはどのくらいの時間を費やしたのだろうか。「レポート作成の時間はどのくらいかかりましたか？ 調査に要した時間およびあなた自身の構想・執筆の時間の合計でお答えください。移動時間は含みません。」との表現でアンケートには具体的な時間を記

入させた。258名の平均は3.6時間である。個人差はかなり大きいのは当然にしても、最頻値で2時間、中央値で3時間となっており、それほど多くの時間を要したわけではないことがわかる。学生のレポートをみると、モデルの選定にさほど時間をかけたわけでもなく、直感的選んで記述したものも散見された。より深く調査ができるように課題の出し方に工夫の余地があると思われる。

表6 キャリアモデルのレポート作成時間

1時間未満	3	（ 1.2）	平均値	3.6時間
1時間以上2時間未満	53	（ 20.5）	中央値	3.0時間
2時間以上3時間未満	72	（ 27.9）	最頻値	2.0時間
3時間以上4時間未満	67	（ 26.0）		
4時間以上5時間未満	17	（ 6.6）		
5時間以上	46	（ 17.8）		
合計	258	（ 100）		

（ ）内は回答者総数258に占める割合（％）

4-5 課題の評価

キャリアモデルの課題に取り組んだことの自己評価に関して、表7の5項目について、①そうである、②ややそうである、③どちらでもない、④ややそうでない、⑤そうでない、⑥わからないの6選択肢にて回答を求め、このうち①②を肯定回答、④⑤を否定回答、③を中間回答として集計した。

まず、今回の課題の目標である「共感できる働き方が見つかった」という点について、肯定回答は88.8%であり、この面での目的はほぼ達成されたとみてよいだろう。次にこの課題の難易度について、キャリアモデルを見つけないこと、共感できる働き方を見つけないこと、レポートを書くことの3側面から質問した。いずれも肯定回答が4割弱、否定回答が4割強で、難しくなかったとする意見が若干多いものの、難しかったと感じる学生も同数近くいることがわかる。「共感できる働き方の“共感”とはどういう意味か?」という質問も出されるなど、考えにくかった部分もあったようである。また、自由にさがしてよいというのも難しく感じた理由のひとつであった。ただ、提出されたレポートをみると各自努力して見つけてきた跡をかいま見ることができ、乗り越えられない難しさではなかったと思われる。

最後に「キャリアモデルの発見は自分のキャリアデザインを描くのに役立つ」とについての肯定回答は77.1%であった。キャリアモデルの探索は自分のキャリアをデザインする

という最終課題の前に行う作業であることを学生には伝えてきたが、ここでの否定回答は3.5%にすぎず、学生はおおむね課題の趣旨を理解し、それにむけて前向きにキャリアモデルの課題をとらえることができたものと言えるだろう。

4-6 キャリアモデルの感想

この課題を終えた学生たちはどのような感想をもったのであろうか。アンケートの最後には、キャリアモデルレポートを経験した感想を自由記述方式にて求めた。全体的には肯定的意見が多く、「自分が共感する働き方が見つかった」とストレートに表現する者もいれば、「キャリアデザインを描けそうな気がする」「意外と自分にはやりたいことがあるんだなとわかった」という自分自身の発見につながったとの意見も多かった。もうひとつ目立った感想として「よいきっかけとなった」というものである。低学年次の学生にとって、課題でもなければ職業について真剣に考える機会はなかなかない。かつ、今回の課題の重要なところは「調べる」ことにある。この点を含めてよいきっかけとなったとの感想をもたせたことは狙いどおりである。調べるといふ点で言えば、リクナビ、キャリアナビなど「職業研究のサイトを知ったことはよかった」との感想もあった。低学年のうちにインターネットや書籍で職業研究ができることを実体験し、その方法を学んだことは、彼

表7 キャリアモデル課題の評価

	肯定 回答	否定 回答	中間 回答	わからない ・無回答
今回のレポートで自分の「共感できる働き方」は見つかった	88.8	3.5	6.6	1.2
キャリアモデルを見つけるのは難しかった	36.8	40.7	21.3	1.2
共感できる働き方を見つけるのは難しかった	39.5	40.3	19.4	0.8
レポートを書くのは難しかった	36.4	41.9	21.3	0.4
キャリアモデルの発見は自分のキャリアデザインを描くのに役立つ	77.1	3.5	16.3	3.1

()内は回答者総数258に占める割合(%)

らのキャリア形成に好ましい影響を与えるものと期待したいところである。

このほか「いろいろな働き方をみて楽しいと思った」「働く人がかっこいいと思った」との感想もあった。文字や写真による情報ではあるが、職業人の実際の姿をみせることは働くことへの意欲を高める効果をもたらすとも考えられる。

一方、この手法の課題を抽出するためには否定的な感想から学ぶべきところも大きいと考えられる。全面的に否定する意見はなかったが、「共感という意味がわからなかった」という趣旨の感想は複数あった。例示しながらより詳しく説明すべき反省点である。もうひとつの否定的な感想として、書き方の問題がある。A4紙1枚に収めることを条件としたが、コンパクトにまとめることに慣れていない学生にとって、これは難しかったようである。また「共感したと思っても言葉にするのが難しかった」という感想もあった。このほか「直接会わないと納得できない」とのもっともな意見もあった。憧れの先輩モデルを通じてさらに職業研究を深めていくためには、直接会ってインタビューすること、またその方法を伝授するなど発展方向を考える必要があるだろう。

5 . 結論

本稿は、キャリアモデルというキャリア教育の手法の有効性を検討するため、山口大学での実践を報告するとともに、課題を体験した学生へのアンケート調査の結果を分析し、考察を行った。全体的な結果として、学生の評価も高く、キャリアモデル手法の有効性が確認されたものと考えている。

今後この手法は大学生のキャリア教育に活用されるべきと考えるが、少なくとも山口大学における実践のなかでは、以下の課題が明らかになってきた。

ひとつは、調べるということをより強調すべきであるという点である。今回2割弱の学生が旧知の人物をモデルとしている。このなかには高校時代の先生に電子メールを送ってキャリアを質問したとの前向きな学生も含まれるが、以前に会った印象のみで記述した学生も少なからず存在した。幅広く働き方をみてキャリアモデルを見つけていくという点で、調べることをより前面に出した課題設定をすべきであり、かつ、講義のなかでは調べ方の解説をより丁寧にするべきであった。改善すべき点と考える。

また今回は、情報源を指定したものではないが結果的に既存の情報の活用を促しており、この点で以下の課題が浮かび上がってくる。すなわち道筋が描けないケースが多く出現するという点である。キャリアナビ・リクナビなどの既存サイトの利用は作業を効率化し、かつ、視野を広げる面で望ましい。ただし、当然ながらこの課題のためにサイトをつくっているわけではないので、ある特定部分の情報が得られないことは容易に想像される。今回の課題で調べたいことのひとつに、モデルとなった人物がどのような道をたどって現在に至っているのかという点がある。つまり学業から就業へ、大学から会社への歩みを学ぶことは重要だと考えるが、個人の歩んだ道を詳細にたどることはこれらサイトでは困難であろう。さらに言えば、この授業の目的は「大学時代の目標を明確に…」でもあり、キャリアモデルの大学時代の過ごし方も知りたいところであるが、ここまでの情報を得るのは相当に困難であると言わざるをえない。例えば、キャリアデザイン講義に来ていただいたOBOGの情報蓄積を図っていくことなど、学業から就業への道筋を描いたキャリアモデル候補者の蓄積も求められている。

これらの点を改善しつつ大学生のキャリア教育手法としてのキャリアモデルをさらに充実させていきたいと考えている。

(学生支援センター 助教授)

注：

- 1) 株式会社ディスコの「就職活動に関する調査2004」によると、4年生の6月調査で「就職活動中に最も知りたかった情報」として最も多かった回答は「実際の仕事内容」が41.5%で、第二位の「社内の雰囲気」(19.7%)を大きく引き離してトップとなっている。学生たちは入社して実際にどういう仕事をするのかに関する情報を欲しており、若手社員が実際にやっている仕事を語ることは学生の求める情報でもある。
- 2) 古野 [1999] では、ひとつひとつのロールモデルを類型化したものに「キャリアモデル」という用語を与えているが、本稿で述べるキャリアモデルは、ここでいうロールモデルのことである。
- 3) キャリナビ編集部『天職の見つけ方～親子で読む職業読本』の冒頭にはこのことが記されている。
- 4) リクナビの先輩情報は、各社に勤務する人物が名前・職務経験・顔写真入りで登場し、「これが私の仕事」「ズバリ！私がこの会社を選んだ理由ここが好き」「だからこの仕事が好き！一番うれしかったことにまつわるエピソード」「今だから話せる、一番の失敗談」「先輩からの就職活動アドバイス！」を一コーナー100～300文字程度で語っている。ただしこのサイトにはリクナビを活用して採用を行う会社が伝える情報が得られない。すなわち大学生の

新卒募集をしない会社の先輩情報はこのサイトには掲載されないことに留意する必要がある。

- 5) キャリナビのミッションは、「青少年に、様々な生き方や職業に触れる機会を提供し、感じたこと・考えたことを他者に伝える（表現すること）を通じて自分の生き方を真剣に考え、大切に作るきっかけを与え、夢と誇りを持って自立した人間として社会参画できるよう勇気付け（inspire and empower）していくこと」とされている。
<http://www.carinavi.org/>
- 6) 学校教育での活用事例は以下のサイトに紹介されている。
<http://www.carinavi.org/db/teacher/>
- 7) 高学年向けの授業のなかで主に親へのインタビューを実施する（平尾 [2005] 参照）

<引用文献>

- キャリナビ編集部『天職の見つけ方～親子で読む職業読本』, 新潮社, 2004.8
- キャリナビ編『この人がかっこいい！この仕事がおもしろい！』, 日経BP社, 2003.10
- 平尾元彦「キャリア教育の手法としてのキャリアインタビュー」, 大学教育（山口大学大学教育機構紀要）, Vol.2, 2005.4, pp.85-94
- 古野庸一「キャリアデザインの「必要性」と「難しさ」（キャリアデザイン支援に向けた「キャリアモデル」の研究）」, Works（リクルートワークス研究所）, Vol.35, 1999.9, pp.4-7